

多比良天神原遺跡Ⅱ

地方特定道路整備事業（主要地方道神田吉井停車場線）に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2008

群 馬 県 藤 岡 土 木 事 務 所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

地域に密着したいわゆる生活道の整備は、それぞれの地における生活の向上をはかる上で欠くことのできないものであります。群馬県西部の藤岡市神田と多野郡吉井町を結ぶ神田吉井停車場線も、吉井町の中心部から多比良地区を経て藤岡市や神流町・埼玉県方面を結ぶ主要路として、古くから利用されてまいりました。

近年、地域間道路の整備が進む中で、この道路の整備も主要な事業として計画され、これにかかる埋蔵文化財調査が吉井町教育委員会によって実施されてまいりました。

平成19年度に至り、当事業団は群馬県からの委託を受け、この道路工事にかかる多比良天神原遺跡Ⅱの発掘調査を行いました。これによりおもに縄文時代や江戸時代の人々の暮らしや信仰の様子を物語る遺構や遺物の発見がありました。

この調査報告書は、これらの調査成果や記録をまとめ、資料と情報の保存と活用をはかるために刊行するものであります。本書が群馬県の歴史を究める一助となりますよう、広くご活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、この調査事業の実施・推進にお力添えをいただいた関係機関や住民の皆様に、衷心より感謝申し上げます。

平成20年12月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇夫

例 言

1 本書は、平成 19 年度地方道路交付金事業（主要地方道神田吉井停車場線）に伴う埋蔵文化財発掘調査について、平成 20 年度地方特定道路整備事業として作成された報告書である。

2 本書に掲載の多比良天神原遺跡Ⅱの所在地は、次のとおりである。

群馬県多野郡吉井町多比良字南畑甲 2685・2686・2687 番地

3 発掘調査は、群馬県藤岡土木事務所の委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。発掘調査期間及び発掘調査組織は、次のとおりである。

期間 平成 19 年 9 月 1 日～同年 9 月 30 日

管理 理事長 高橋勇夫 常務理事 木村裕紀

事業局長 津金澤吉茂 総務部長 萩原 勉

総務グループ 笠原秀樹（GL）・須田朋子・矢島一美・齋藤陽子・今井もと子・若田 誠・

佐藤美佐子・狩野真子・武藤秀典

経理グループ 石井 清（GL）・斉藤恵利子・柳岡良宏・本間久美子・北原かおり

調整 調査研究部長 西田健彦

調査 調査研究グループ 唐澤至朗・坂口 一

4 整理事業は、平成 20 年度地方特定道路整備事業（主要地方道神田吉井停車場線）に伴い、群馬県藤岡土木事務所の委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理期間及び整理組織は、次のとおりである。

期間 平成 20 年 9 月 1 日～同年 9 月 30 日

管理 理事長 高橋勇夫 常務理事 津金澤吉茂・木村裕紀

総務グループ 笠原秀樹（GL）・須田朋子・矢島一美・齋藤陽子・今井もと子・若田 誠・

佐藤美佐子・狩野真子・武藤秀典

経理グループ 佐嶋芳明（GL）・斉藤恵利子・柳岡良宏・本間久美子・北原かおり

調整 資料整理部長 相京建史 資料整理第 2 グループ 大木紳一郎（GL）

整理 資料整理部第 2 グループ 唐澤至朗（担当）

（整理業務）鹿沼敏子・大塚とし子・矢野純子・小金澤たみ子、（機械実測業務）田所順子・岸弘子

・小池益美・田中精子・山口洋子、（デジタル写真図版作成）牧野裕美・市田武子・安藤美奈子・酒井史恵・

廣津真希子・荒木絵美・高梨由美子・矢端真観・横塚由香・下川陽子、（写真撮影）佐藤元彦

5 本書に掲載した遺構写真は担当者が、遺構航空写真と遺構測量図は技研測量設計株式会社に委託撮影・作図したものである。

6 本書の編集・執筆は、唐澤至朗が行った。なお、縄文土器の観察・細分に橋本 淳の協力を得た。

7 調査の実施から本書の刊行に至る間、次の機関並びに各位のほか多くの方々のご指導・助言・協力を得た。

記して謝意を表す。

【敬称略・個人五十音順】

群馬県県土整備部・群馬県藤岡土木事務所・群馬県教育委員会・吉井町教育委員会・藤岡市教育委員会、小根澤雪絵・小林次郎・塩澤信満・神保佑史・竹原観秀・寺内敏郎・長谷川寛見・矢島 浩。

8 本遺跡の調査及び整理に関わる出土遺物・実測図・写真等の資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

- 1 本書で使用した国家座標は、日本測地系によるものである。発掘調査においては、その数値をそのままグリッドとして用いた。
- 2 本書で使用した地形図は、国土地理院 1:25,000 「富岡」・「高崎」・「上野吉井」及び「藤岡」を用いた。
- 3 遺構平面図及び断面図に示した標高値の単位は、mである。
- 4 遺構平面図・断面図の縮尺は、1/200・1/80・1/60・1/30 とし、各図に示した。単位はmである。
- 5 遺物実測図の縮尺は、1/6・1/4・1/3・1/1 とし、各図に示した。単位は cm である。
- 6 遺構の土層・土器等の色調表記は、農林水産省農林水産技術会事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版標準土色帳』1993 年版に準拠した。
- 7 遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・写真図版とも、すべて共通している。なお、遺物観察表には、調査時の出土地点・取上番号を付した。

目 次

序（理事長 高橋勇夫）

例 言

凡 例

目 次・挿図目次・表目次・写真図版目次

第 1 章 調査の方法と経過・・ 1

第 1 節 発掘調査に至る経緯

第 2 節 発掘調査の方法と経過

第 3 節 整理の方法と経過

第 2 章 遺跡の環境・・ 2

第 1 節 地 理

第 2 節 地形と地質

第 3 節 歴 史

第 4 節 基本土層

第 3 章 検出された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

第 1 節 縄文時代の遺構と遺物

第 2 節 古代・中世の遺構と遺物

第 3 節 近世の遺構と遺物

第 4 章 まとめ ー検出遺構からみた多比良天神原遺跡Ⅱー・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

写真図版

抄 録

插图目次

第1图	周边遗迹分布图 (S=1:25,000) ····· 5	第9图	古代・中世遗物实测图 ····· 14
第2图	调查区域及び遺構全体图 (S=1:200) ··· 7	第10图	1号掘立柱建物实测图 ····· 15
第3图	基本土層概念图 (S=1:20) ····· 9	第11图	1号基壇建物实测图 ····· 16
第4图	11号・12号土坑实测图 ····· 10	第12图	近世遺物实测图 ····· 18
第5图	1号住居(上)・同埋甕炉(下左) ・同石囲炉(下右)实测图 ····· 11	第13图	1号区画溝实测图 ····· 19
第6图	縄文時代遺物实测图① ····· 12	第14图	1号～3号・5号・7号・9号・10号 土坑实测图 ····· 19
第7图	縄文時代遺物实测图② ····· 13	第15图	多比良地区寺院等位置图 (S=1:25,000) ····· 22
第8图	4号・6号・8号土坑实测图 ····· 14		

表目次

第1表	主要周边遗迹一览表 ····· 6	第5表	遺構外遺物観察表(古代・中世) ····· 14
第2表	1号住居遺物観察表 ····· 13	第6表	1号基壇建物遺物観察表 ····· 16
第3表	11号土坑遺物観察表 ····· 13	第7表	1号区画溝遺物観察 ····· 18
第4表	遺構外遺物観察表(縄文時代) ····· 13	第8表	多比良地区寺院一覧表 ····· 21

写真図版目次

PL-1	航空写真	PL-8	1号区画溝
PL-2	基本土層・旧石器試掘	PL-9	土坑①
PL-3	1号住居①	PL-10	土坑②
PL-4	1号住居②	PL-11	土坑③
PL-5	1号掘立柱建物	PL-12	出土遺物①
PL-6	1号基壇建物①	PL-13	出土遺物②
PL-7	1号基壇建物②		

第1章 調査の方法と経過

第1節 発掘調査に至る経緯

多比良天神原遺跡Ⅱの発掘調査は、主要地方道神田吉井停車場線の整備事業に伴い実施されたものである。この調査は、平成17（2005）年度の群馬県西部県民局藤岡土木事務所と群馬県教育委員会との協議を踏まえ、文化課（現文化財保護課）による試掘調査と調整を経て実施が決定され、藤岡土木事務所の委託を受けて財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団がこれに当たることとなった。

調査は、工事計画に合わせ、平成19（2007）年度の9月1日から30日の1ヶ月を充てて実施した。

第2節 発掘調査の方法と経過

詳細発掘に先行して掘削機による表土除去を行った。調査区域東半では、表土直下に近世の墓地の存在を想起させる石造物を検出したため、この検出面300㎡を第1面として調査を行った。

第1面においては、天明3（1783）年降下の浅間A軽石（As-A）を含む盛土基壇を伴う建物跡を検出するとともに、大がかりな造成作業がなされていたことを確認した。

調査区域西半の300㎡は近世までの土層堆積は残存せず、表土下が直に関東ローム層となっており、顕著な削平が認められた。このローム層上面を第2面とし600㎡を調査した。

第2面においては、縄文時代後期の住居跡、縄文・中世・近世の土坑、屈曲する溝を確認し調査した。第2面調査の終了後、2m四方のトレンチを6カ所を設け、この24㎡を第3面としてローム層内の旧石器文化の確認調査を実施した。調査はローム層下約1.7mの浅間室田軽石（As-MP）層下に位置する粘質土層まで行ったが、遺物の検出には至らなかった。

発掘終了後、実測図面・調査写真の確認を行い、掘削機等を用いて調査区を埋め戻した。

第3節 整理の方法と経過

整理作業は、平成20（2008）年度事業として9月1日から9月30日までの間、当事業団分室において、整理担当者1名・補助員4名の編成で行った。なお、写真図版の調整は、本部に設置されたデジタル専任班補助員1名がこれに当たった。

まず、土器や石器・石像物などの出土品については、洗浄及び注記などの基礎作業を既に行っていたため、洗浄等の状況確認を行いつつ、帰属時代ごとの分別を行った。

次いで、注記・調査記録をもとに遺物台帳を作成した。また図版掲載個体の選定を行った。この後、遺物の接合・復原作業、写真撮影を行い、実測・トレース化作業を行った。遺構については、住居跡・土坑・基壇建物などの遺構図の平面図・土層図調整とトレース、図版作成・全体のレイアウト調整及びデジタル処理を行った。

遺構に関わる写真は、航空写真を除き、調査現場においてもデジタル撮影となっており、既に発掘調査の時点で基礎整理済みであった。その成果をもとにレイアウトを行った。また、出土品についても同様な情報処理を行った。

また、これに関連して、吉井町・藤岡市等周辺における地形観察や、平成8～9年度に吉井町教育委員会が先行して実施した同一遺跡隣接区の発掘調査資料、廃寺を含む寺院に関わる中世及び近世文書の調査と資料検討とを行った。

挿図及び写真図版化作業の終了後、すべての出土品・写真資料・図面の、整理後台帳整備及び情報化登録を行い、それぞれ情報館・収蔵庫へ収納した。

なお、報告文の作成は、発掘調査上の所見、遺跡を取り巻く地理的・歴史的環境、出土品に関する情報を踏まえつつ関係専門職員の意見を徴して、これに当たった。

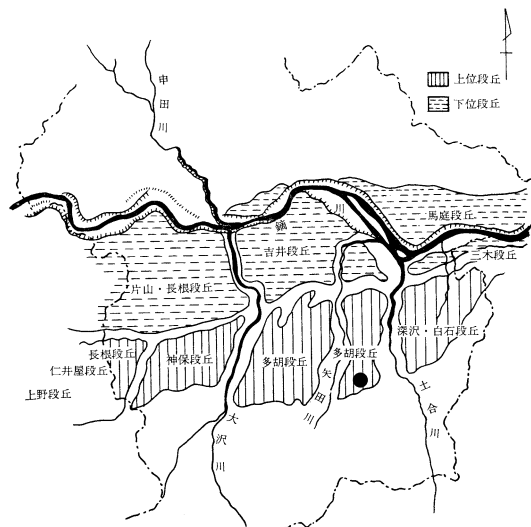
第2章 遺跡の環境

第1節 地理

関東地方の北西部に位置する群馬県は、東毛を頭部、中毛を胸部、北毛を左翼部と尾部、西毛を右翼部にあて「鶴舞う形の群馬県」と称される。県域内には、利根川及びこれに合する片品川・吾妻川・烏川・神流川・渡瀬川などの多くの中小河川があるが、その一つ鐮川は長野県境の荒船山周辺を水源としてほぼ東に向かって流れ、高崎市倉賀野付近で烏川と合流して利根川に至る。その流域には、南牧村・下仁田町・富岡市・甘楽町・吉井町・藤岡市の各市

第2節 地形と地質

鐮川流域には河岸段丘形成され、特に富岡市から吉井町に至る中流域右岸（南側）に顕著である。この段丘には大別して鐮川から下位段丘と上位段丘があり、下位段丘には片山長根・吉井・馬庭段丘等が、上位段丘には神保・多胡・深沢白石段丘等と個別称され、支流の大沢川・矢田川・土合川などによる解析谷によって画されている。また、上位段丘の基部は浸食が顕著なため、あたかも丘陵のような景観を呈しており、これを上位段丘とし、以下を中位段丘と細分する見解もある。



吉井町の河岸段丘（吉井町 1974） ● 天神原遺跡

町村があり、「甘楽の谷」と通称されている。また、北の烏川・南の神流川の流域とあわせ西毛地域をなしている。

東西に開けたこの鐮川流域では、河岸段丘が発達し、また日照・通風に優れ、後述するように古くから産業・文化が発達しており、吉井町にもこれを証する多くの遺跡が残されている。多比良天神原遺跡もこの一つとして、町の南東部の段丘上・多比良字天神原及び南畑に所在する。

多比良天神原遺跡は、上位段丘（多胡段丘）の基部に位置し、背後には牛伏砂岩を産出する牛伏山地が間近に聳えている。

牛伏山は標高 490m 余、遺跡周辺の上位段丘基部は同 180 m 余、上位段丘端部では同 140 m 余、下位段丘は 110m 余を測り、それぞれ顕著な比高差を示している。



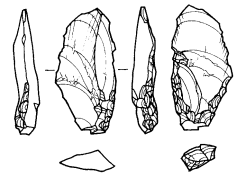
鐮川右岸上位段丘面・吉井 I.C. 周辺（群馬埋文 1994）
上方（南）は牛伏山地、その手前は浸食が進む上位段丘基部、高速道路は上位段丘面中央を貫いている。

【参考文献】（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992 『黒熊中西遺跡（1）』・同 1994 『矢田遺跡V』、藤岡市教育委員会 1988 『滝前・滝下遺跡発掘調査報告書』、吉井町教育委員会 2000 『多比良天神原遺跡発掘調査報告書』、吉井町 1974 『吉井町誌』。

第3節 歴史

旧石器時代

鑄川右岸には、上位と下位の段丘が形成されているが、上位段丘上の調査において、甘楽町白倉下原遺跡や同天引原遺跡などから後期旧石器の検



追部野遺跡出土ナイフ形石器
(群馬埋文 1997)

出が報告されている。本遺跡の周辺では多比良追部野遺跡の始良 Tn 火山灰 (AT・約 2.4 ~ 2.5 万年前) 含有層下の粘土層から、石器群が検出されている。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、上下両段丘上・沖積地に広く認められ、多比良中城からは早期の尖底土器が発見されるなど古くから縄文時代を通じて文化の展開があった。本遺跡では、前期・後期の遺物を得ている。

弥生時代

土地開発を伴う生産・生活様式が起こった弥生時代は、中期・紀元前 2 ~ 3 世紀ごろ東日本に波及したとされる。本遺跡周辺では、川内・入野・神保植松・多比良追部野の各遺跡などから弥生時代後期の住居や樽式土器などの遺物が検出されている。

古墳時代

鑄川流域の古墳文化は前期・4 世紀後半からと考えられる。富岡市北山に所在する前方後方墳 (墳丘長 28m) の茶臼山西古墳からは、方形規矩鏡などが出土した (群馬埋文 1988)。また、隣接する茶臼山西古墳 (円墳・40m) からは、神人車馬龍虎鏡などが出土している。北山丘陵の周辺部の殊に南側を占める額部・岡本地区がヤマト王権の東国支配に関わり、次代にも続く初期開発地ではなかっただろうか。



北山茶臼山西古墳と方格規矩鏡 (群馬埋文 1988)

中期・5 世紀段階では全国的に古墳の大型化が著しく、開発地の拡充が背景をなしたことが想起される。この時期の古墳としては、中流域では甘楽町福島天王塚古墳 (前方後円墳・墳丘長 76m) が前半、藤岡市白石の稲荷山古墳 (前方後円墳・140m) が中葉、藤岡市落合の七輿山古墳 (前方後円墳・147m) が後半の大型古墳である。

後期・6 世紀から 7 世紀初頭段階では、後期後半の甘楽町福島 の笹森稲荷古墳 (前方後円墳・100m) や、末葉の藤岡市上落合の伊勢塚古墳 (円墳・22m) が目を引く。また吉井町神保の神保下條 2 号古墳からは、優れた形象埴輪が出土している。7 世紀には中小首長の造る小型古墳が群集をなし、階層分化と土地利用の特定化が看取される。



神保下條 2 号古墳出土埴輪 (群馬埋文 1992)

奈良・平安時代

律令制下の吉井町域は、そのほとんどが多胡郡に属した。町内に残る特別史跡『多胡碑』の銘文 (1) や、『続日本紀』の記事 (2) から、多胡郡の建郡は和銅 4 (711) 年とされる。多胡郡は、織裳・韓級・矢田・大家・武美・山等の六郷からなり、尾崎喜左雄によって、織裳郷は折茂、韓級郷は神保、矢田郷は矢田、大家郷は池、武美郷は多比良・石神・黒熊、山等郷は高崎市山名にそれぞれ比定されている (尾崎 1980)。

大家郷は郡の中核とみられ、『多胡碑』もこの地に残っている。織裳郷は甘楽郡に接する水田地帯にあり、広く条里遺構の検出が見込まれている。神保は神領の意味で、当地には古くから辛科神社が鎮座しており、韓級の地名を伝えるものであろう。矢田

第2章 遺跡の環境

郷は八田とも称されていたが、膨大な数の紡錘車を出した矢田遺跡がこの中心集落であったと考えられ、当時の生産の様相を考える上で重要である。



(3) (群馬埋文 1990)

矢田遺跡出土刻書紡錘車 (群馬埋文 1990)

武美郷は南東の丘陵地に当たり、天神原遺跡のある多比良はこの郷である。山等郷は、山字・山奈の字が充てられ、現在の山名の地が中核であろう。特別史跡『山の上碑』がある。

また、「多胡」を「帰化人の多い地」とし、『多胡碑』にみられる「羊」を郡司と捉え、織裳や韓級の郷名由来や矢田遺跡の様相から勘案するならば、多胡郡が律令制初期にける「経済特区」であったと捉えることもできよう。上野国分寺への献納瓦とみられる刻書瓦には、多胡郡ゆかりの郷名・人名が多くみられ、この地の経済的繁栄をうかがい知ることができよう。ちなみに、複弁八葉蓮華文軒丸瓦・三重弧文軒片瓦を出土する、馬庭の東遺跡は多胡郡内の官衙に付随する寺院と目されている。

(1) 『多胡碑』銘文「弁官符上野国片岡郡緑野郡甘楽郡併三郡内三百戸郡成給羊成多胡郡 和銅四年三月九日甲寅 宣左中弁正五位下多治比真人 太政官二品穂積親王 左大臣正二位石上尊 右大臣正二位藤原尊」

(2) 『続日本紀』和銅四年三月条記述「割上野国甘楽郡織裳韓級矢田大家緑野郡武美片岡郡山等六郷別置多胡郡」

(3) 矢田遺跡出土刻書紡錘車刻書「八田郷 八田郷」この紡錘車等が、八田郷の備品の可能性を示すものであろう。

鎌倉・室町・戦国時代

平安時代後期には各地に荘園が設けられ、土地支配の私有化が進んだ。当地に立てられた多胡荘は源氏の支配下に入ったが、以降、在地武士団が中世を通じて実質支配をした。『吾妻鏡』には小串右馬允などととも、多比良小次郎の名も散見する⁽⁴⁾。また、南北朝期には、小串四郎左衛門尉・神保太郎左衛門尉・瀬下宮内左衛門尉の支配が認められる。

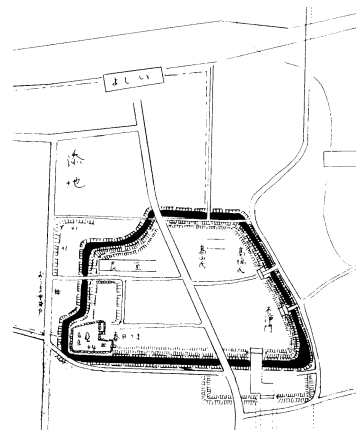
戦国時代、西上州一円は守護領として上杉氏の支配下に入ったが、信濃から侵攻する武田氏・相模から北上する北条氏に挟撃され、不安定な地域支配が

続いた。こうした中で、在地の武士層はよくその実質支配を保った。箕輪攻城の後に武田信玄に従った武士として、馬庭中務少輔家重・神保小次郎昌光の名が『生島足島神社文書』に見える。

(4) 『吾妻鏡』正嘉二年三月一日条記述「將軍家二所御進發 初度着浄衣 (中略) 次後陣隨兵十二騎 (中略) 多胡宮内左衛門尉跡多比良小次郎 (後略)」 鎌倉幕府六代將軍 宗尊親王の参詣行列に供奉。

江戸時代以降

天正 18 (1590) 年、小田原北条氏が滅亡し、徳川家康が関東入封することにより、関東の八カ国(相模・武蔵・安房・上総・下総・上野・下野・常陸)の領国支配は大きく変えられた。いわゆる外様大名・国持ちを排した。「甘楽の谷」では、甘楽小幡藩(織田家・2万石)・富岡七日市藩(前田家・1万石)が最大で、多胡郡も天領・旗本知行地・七日市藩領・小幡藩領、その他寺社領に分割支配された。また江戸後期宝永 6 (1709) 年に吉井藩(鷹司松平家・1万石)も置かれた。吉井藩陣屋は当初矢田に、次いで吉井宿に設けられた。多比良は、吉井藩領に属した。



吉井藩陣屋縄張り (山崎一 1978)

近代以降の吉井町周辺は、廃藩置県により岩鼻県・小幡県・七日市県を経て、明治 4 (1871) 年、第一次群馬県となった。官営富岡製糸場の設置など製糸業の振興がはかられ、小坂鉄山の開発・上信電鉄線の敷設も行われた。これらは我が国近代化の遺産として高い評価を得ている。

現代では、国道 254 号線のバイパス整備や上信越自動車道の開通など、交通体系の充実によってあらたな発展の端緒が開かれている。



第1図 周辺遺跡分布図 (S=1:25,000) (●天神原遺跡Ⅱ)

第2章 遺跡の環境

第1表 周辺主要遺跡一覧表（第2図 周辺遺跡分布図に対応）

番号	遺跡番号・遺跡名	時代	概要	調査報告書
1	0202・多比良天神原遺跡	縄文・古墳・近世	集落・古墳・近世墓、(I - 吉井教委2000、II - 群馬埋文2008)	吉井教委2000
2	J033・瀬戸の城(向平城)	中世	城館、平井城の副城の一つ。	
3	0181	縄文・平安～近世	包蔵地	
4	0180・J 032 多比良城(新堀城)	縄文・古墳・平安～近世	包蔵地・城館	
5	0166	縄文・平安・中世～近世	包蔵地	
6	0169	縄文・古墳～近世	包蔵地	
7	0164	古墳・奈良～平安	包蔵地	
8	0165・多比良追部野遺跡	旧石器～近世	各時代集落・火葬墓・道路・溜池	群馬埋文1997
9	0015	縄文～近世	包蔵地	
10	0118・入野遺跡	縄文～平安	包蔵地	
11	0122	近世	包蔵地	
12	0123	弥生～平安	包蔵地	
13	0124	縄文・古墳～平安	包蔵地	
14	0126・黒熊中西遺跡	平安	寺院・包蔵地	群馬埋文1992
15	0132	古墳・奈良～平安	包蔵地	
16	0128	縄文・古墳～平安・近世	包蔵地	
17	0133	古墳～平安	包蔵地	
18	0136・黒熊八幡遺跡	縄文・奈良～平安	集落	群馬埋文1996
19	0134	縄文・平安	包蔵地	
20	包034・34 包蔵地遺跡	縄文・古墳・奈良～平安	包蔵地、【藤岡市】	
21	J 029・小串館	中世	城館	
22	0081・包029・29 包蔵地遺跡	縄文・平安・近世	包蔵地、【一部藤岡市】	
23	0077	古墳～平安・近世	包蔵地	
24	0071	奈良～平均・近世	包蔵地	
25	0070	平安・近世	包蔵地	
26	0073	縄文・古墳・平安・近世	包蔵地	
27	0074	平安・近世	包蔵地	
28	0075	縄文・平安・近世	包蔵地	
29	0068	古墳～平安・近世近世	包蔵地	
30	J026・馬庭城・他	縄文・平安・中世～近世	城館・包蔵地	
31	0120	縄文・古墳・平安	包蔵地	
32	0117	縄文・古墳	包蔵地	
33	0116	縄文・平安・近世	包蔵地	
34	0066	平安	包蔵地	
35	0110	古墳・中世～近世	包蔵地	
36	Y174・塚原古墳群	古墳・奈良～平安	古墳群・包蔵地	
37	特別史跡：多胡碑	奈良	日本三古碑の一。和銅4(711)年、多胡郡建郡の記念碑か。	
38	0062	縄文・古墳・平安・近世	古墳群・包蔵地	
39	0061	古墳～近世	包蔵地	
40	0063	縄文・平安・近世	包蔵地	
41	0052	古墳～平安・近世	包蔵地	
42	Y 090	縄文・古墳・平安～近世	包蔵地	
43	0099	縄文・古墳・近世	包蔵地	
44	0102	縄文・古墳・平安・近世	包蔵地	
45	0094	古墳・平安・近世	包蔵地	
46	0095	古墳・近世	包蔵地	
47	0098	古墳・平安	古墳群・包蔵地	
48	0100	不明	包蔵地	
49	0104	縄文～近世	古墳群・包蔵地	
50	0103・川内遺跡	縄文・古墳・平安・近世	包蔵地	吉井教委1982
51	0105	奈良～平安・近世	包蔵地	
52	0108・椿谷戸遺跡	縄文・古墳～近世	包蔵地	吉井教委2004
53	0109・矢田遺跡	縄文・古墳～平安・近世	集落・生産集落。古代矢田郷の中心集落、多量の紡錘車を出土。	群馬埋文1990
54	0101・多胡蛇黒遺跡	旧石器～古墳・平安・近世	集落。古墳時代後期・奈良時代・平安時代後期の大規模集落。	群馬埋文1993
55	0151	古墳～平安	包蔵地	
56	0159	縄文・古墳～平安・近世	包蔵地	
57	J017・多胡下の城(金沢城)	縄文・奈良・中世	城館・包蔵地包蔵地	
58	0142・神保下條遺跡	古墳・平安・中世	古墳群・包蔵地。第2号古墳からは優れた形象埴輪群が出土。	群馬埋文1992
59	0147	近世	包蔵地	
60	J031・一郷山城	中世	城館	

【参考文献】尾崎喜左雄 1980『上野三碑の研究』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988『大島上城遺跡・北山茶白山西古墳』・1990『矢田遺跡』・1992『神保下條遺跡』・1993『神保富士塚遺跡』・1997『多比良追部野遺跡』、吉井町教育委員会 2000『多比良天神

原遺跡発掘調査報告書』、吉井町誌編さん委員会 1974『吉井町誌』、群馬県史編さん委員会 1985・1986『群馬県史資料編 2・4』、角川書店 1988『角川日本地名大辞典(群馬県)』、山崎一 1978『群馬県古城址の研究・下巻』。

第4節 基本土層

本遺跡では、旧石器試掘グリットとは別に、調査区南側壁沿いに調査坑を設け、現地表下 2.6 m までの土層観察を行って、以下のとおり基本土層とした。

- I 層 表土 現在の耕作土。少量の浅間 A 軽石 (As-A・1783 (天明3) 年) を含む。
- II 層 黒褐色土。少量の浅間 A 軽石 (As-A)、ロームブロックを含む。基壇建物以前の整地盛土。
- III 層 褐色土。少量の浅間 B 軽石 (As-B・1108 (天仁元) 年) を含む。
- IV 層 黒色土。
- V 層 暗褐色土。淡色黒ボク相当。
- VI 層 黒褐色土。
- VII 層 黄褐色ローム。漸移層。浅間板鼻黄色軽石 (As-YP・約 1.3 万年前) を含む。
- VIII 層 黄褐色ローム。浅間板鼻黄色軽石 (As-YP) を含む。
- IX 層 暗黄褐色ローム。硬質。浅間大久保沢白色軽石 (As-Okp・約 2 万年前) を含む。
- X 層 黄褐色ローム。浅間板鼻褐色軽石群 (As-BPG・約 2.1 万年前) を含む。
- X I 層 暗褐色ローム。浅間板鼻褐色軽石群 (As-BPG) を含む。
- X II 層 赤褐色軽石。浅間室田軽石 (As-MP・約 2.4 万年前) 一次堆積。
- X III 層 灰白色粘質土。粘土化した浅間室田軽石 (As-MP) 一次堆積。
- X IV 層 黒灰色粘質土。

183.00m

182.00m

181.00m

180.00m

XIII

I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
X
XI
XII
XIII
XIV

【参考文献】新井房夫編 1993『火山灰考古学』古今書院。

第3図 基本土層概念図 (S=1:20)

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡1、土坑2を確認し調査を行った。また、遺構外から遺物がわずかながら発見されている。

(1) 1号住居

X25581～25587・Y74362～74372に位置。南西―北東方向を長軸とし南西方向に柄部をもつ柄鏡形竪穴住居と考えられるが、耕作による削平・攪乱が著しく、西壁に近い床のごく一部と壁溝等を残すのみで、全容は明らかでない。あるいは鏡部と柄部はそれぞれ別個の遺構とも考え得るが、主軸方向と位置関係・出土遺物の類似性から同一の遺構と捉えておきたい。調査区域外及び欠失部を含む鏡部の有効床面積は、約48㎡と推定される。

鏡部は概ね8mの円形と推定され、壁溝内に結晶片岩が立ち並べられ、床に石囲い炉が設けられていた。炉の南西端に大型の多孔石が据えられていた。石囲いはほとんど遺存せず焼土堆積も顕著ではない。

柄部は長軸2.5m、短軸1.6mを測り埋喪炉が設けられ、底面に結晶片岩を敷設して床としていた。

床面上まで削平が及んでいたため、出土遺物は稀少であった。柄部の炉に埋設されていた深鉢形土器(第2表1～3)のうち、1は炉内に直立して付設され底部を欠いていた。2が1の底部付近から立位で、3が破片状態で検出された。いずれも別個体である。

柄部敷石上からは、破片となって散布していた大型の深鉢形土器1点(同表4)が検出された。

次に、鏡部の石囲い炉南端に付設されていた多孔石(同表5)は、大型の円礫から加工したものとみられ、作業台と考えられる他、設置位置から「火切り臼」としての用途説も補強しうる。この他、柄部から播り石が4点(第2表5～9)、覆土から打製石斧片(同表10)が出土した。

帰属時期は、埋設されていた深鉢土器から後期初

頭の称名寺Ⅱ式期と考えられる。

(2) 11号土坑

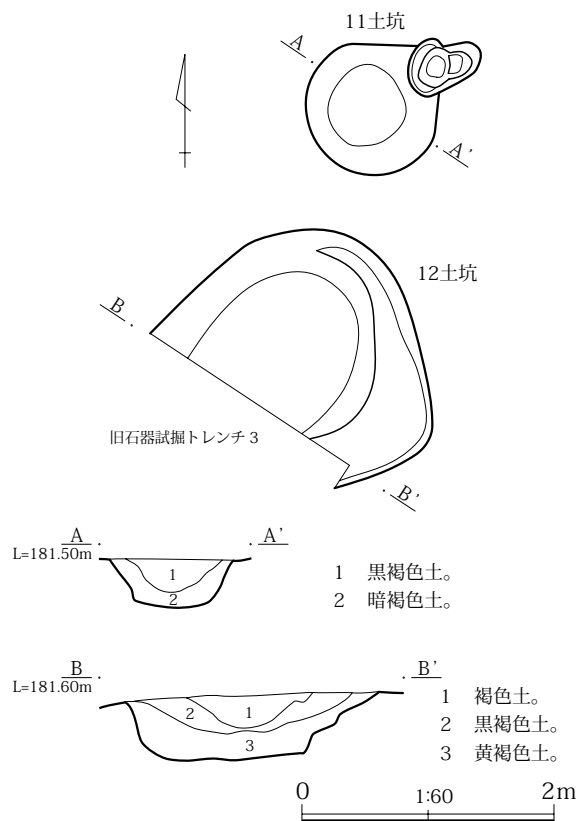
X25578～25579・Y74362に位置。径1m・深さ0.4mの円形を呈する。底面は湾曲しやや硬い。共伴関係は不詳であるが、加工痕のある黒曜石剥片(第3表1)を、覆土中から検出している。

(3) 12号土坑

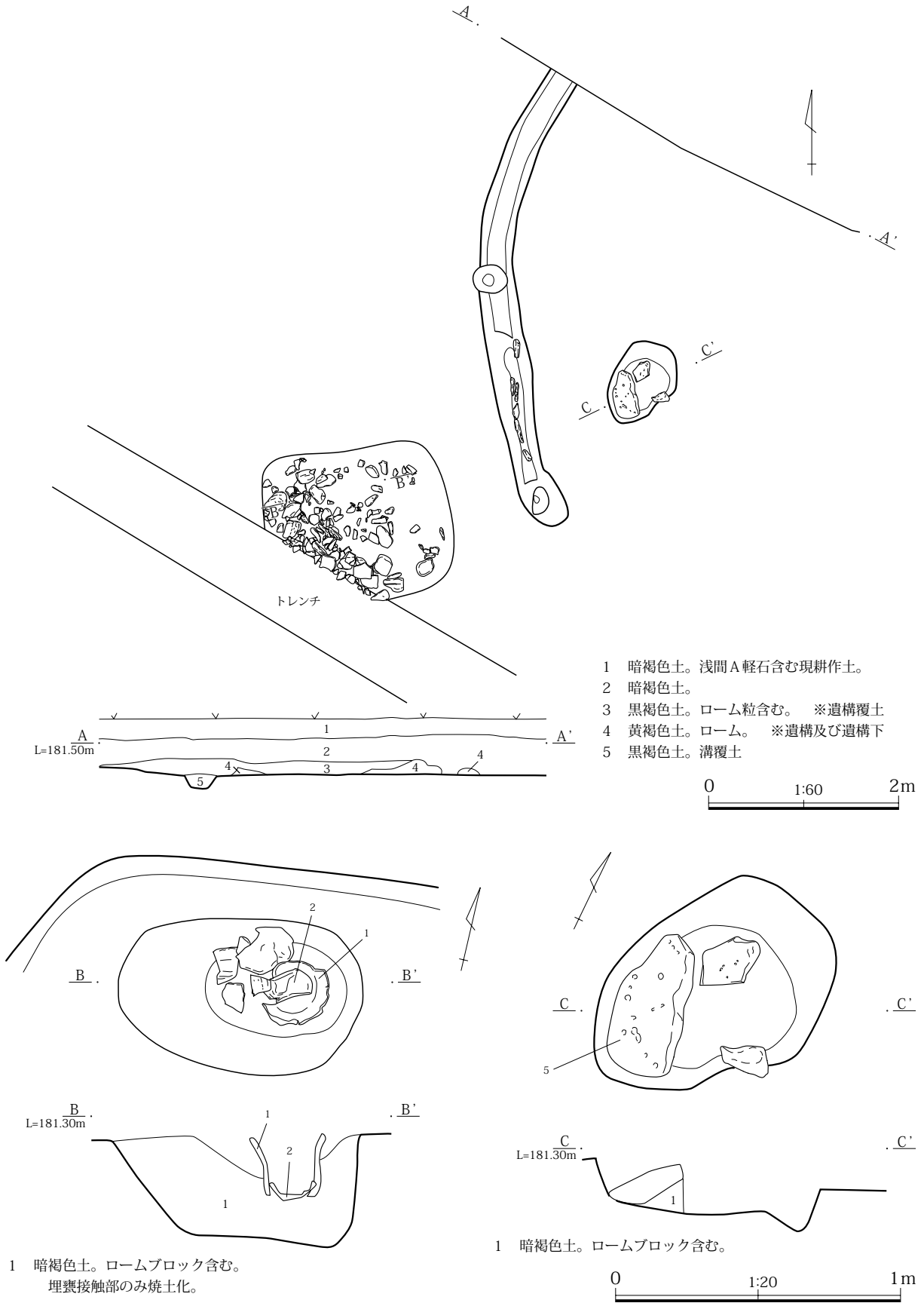
X25575～25578・Y74362～74364に位置。径2m・深さ0.45mの円形土坑である。底面は平坦でやや硬い。

(4) その他の遺物

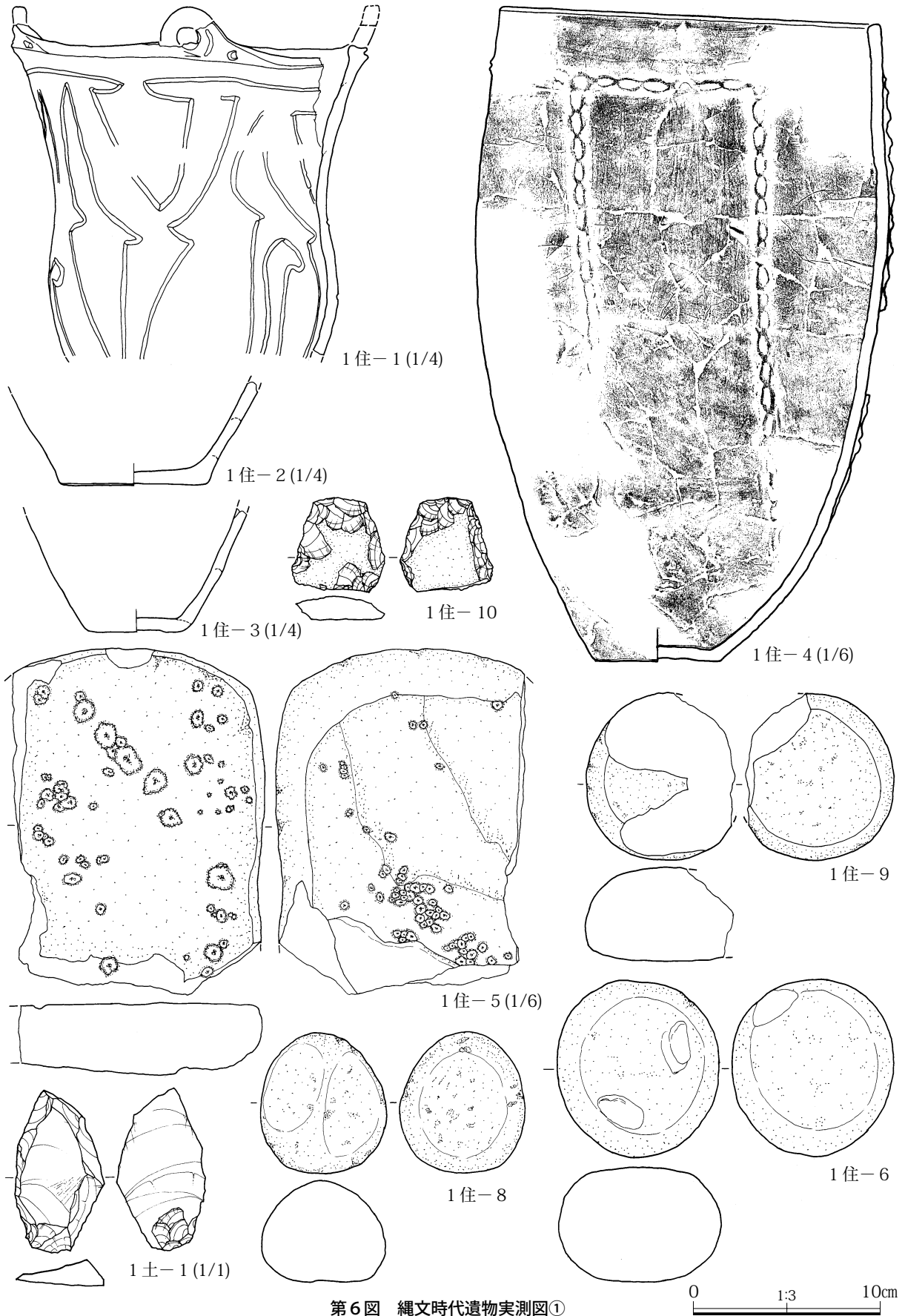
調査において、前期諸磯b式等の土器破片・短冊形打製石斧が採集された。いずれも当該遺構に伴わない資料であるが、本遺跡が前期まで遡りうることを示す資料といえる。(第4表1～5)



第4図 11号・12号土坑実測図

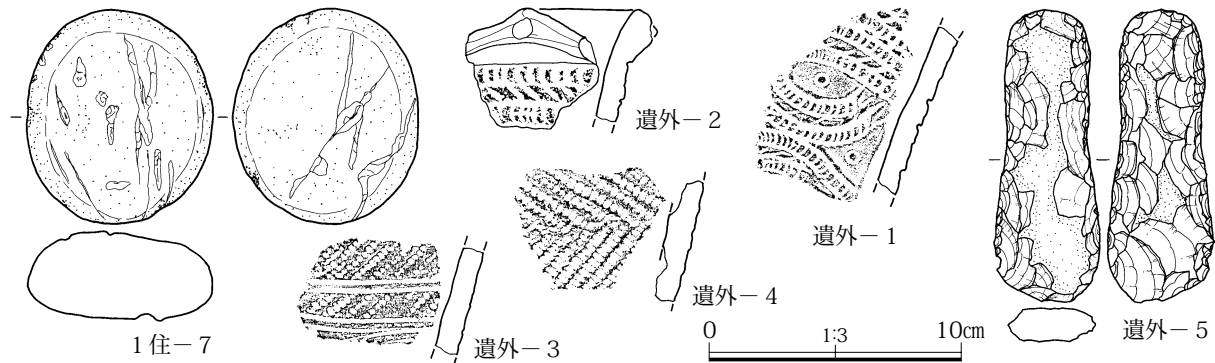


第5図 1号住居(上)・同埋糞炉(下左)・同石囲炉(下右)実測図



第6図 縄文時代遺物実測図①

第1節 縄文時代の遺構と遺物



第7図 縄文時代遺物実測図②

第2表 1号住居遺物観察表 (第6、7図・PL-12)

番号	種類 器種	遺物注記 番号	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④素材	成・整形技法の特徴 (器形・文様の特徴)	残存状態 備考
1	縄文土器 深鉢	1号住-5・ 埋設炉-3	口径 24.5 器高 (24.3)	①普通 ②にぶい橙色 ③砂粒	外面 口唇部に4箇の環状取っ手が直立。縄文等の地文はなく、丁寧な撫での後に変形沈線文を全面に施す。内面 荒れている。体部下位・底部欠失。	2/3 残存 称名寺Ⅱ式
2	縄文土器 深鉢	埋設炉-3	底径 10.7 器高 (7.3)	①普通 ②にぶい赤褐色 ③砂粒	外面 無文、縦方向撫で。 内面 撫で。 底面 無地。	体部下位・ 底部
3	縄文土器 深鉢	埋設炉-3	底径 6.3 器高 (8.8)	①普通 ②にぶい赤褐色 ③砂粒	外面 無文、縦方向撫で。 内面 撫で、荒れている。 底面 無地。	体部下位・ 底部
4	縄文土器 深鉢	1号住一括 ・1・3・トノ	口径 40.0 底径 13.3 器高 68.0	①普通 ②明赤褐色 ③砂粒	口縁 平口縁。 底部 無地。 外面 無文。上位に一条・それに結節し下方に六条の鎖状貼付装飾あり。 内面 丁寧な撫で。	1/2 残存 一部 18 年 度試掘 称名寺Ⅱ式
5	石器 多孔石	1号住 石囲-1	長さ 36.5 幅 26.0 厚み 6.7	④牛伏砂岩	上面は平滑、下面は自然面。鍵の手の二側面は割石加工、他は自然面。上面に大小20余の凹みあり。	3/4 残存 10.38kg
6	石器 播り石	試掘	長さ 9.1 幅 8.7 厚み 6.1	④灰色安山岩	片面の播り顕著。縁辺に叩打損傷あり。	ほぼ完存 10.4 g
7	石器 播り石	試掘	長さ 8.3 幅 7.3 厚み 3.5	④蛇紋岩	縁辺の播り顕著。	完存 320.2 g
8	石器 播り石	試掘	長さ 7.3 幅 6.6 厚み 5.4	④黒色安山岩	扁平面摩滅。縁辺に叩打痕あり。	完存 358.0 g
9	石器 播り石	1号住一括	長さ 8.7 幅 8.1 厚み 5.1	④黄色安山岩	両面及び縁辺の播り顕著。ほぼ1/2の表面が大きく剥離。被熱。	ほぼ完存 425.5 g
10	石器 打製石斧	1号住一括	長さ (4.9) 幅 5.0 厚み 1.3	④灰色安山岩	短冊形と推定。基部のみの残片。	1/3 残存 45.2 g

第3表 11号土坑遺物観察表 (第6図・PL-13)

番号	種類 器種	遺物注記 番号	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④素材	成・整形技法の特徴 (器形・文様の特徴)	残存状態 備考
1	石器 剥片石器	11号坑 覆土	長さ 2.9 幅 1.6 厚み 0.4	④黒曜石	一部に剥離調整痕。製品化過程か。	完存 1.2 g

第4表 遺構外遺物観察表 (縄文時代) (第7図・PL-13)

番号	種類 器種	遺物注記 番号	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④素材	成・整形技法の特徴 (器形・文様の特徴)	残存状態 備考
1	縄文土器 (破片)	1号住一括	縦 8.1 横 5.1 器厚 0.9	①良好 ②明黄褐色 ③砂粒	外面 半裁竹管文をループ状に施し、空隙に竹管文を付す。 内面 撫で。	体部上位片 諸磯b式
2	縄文土器 (破片)	1号住一括	縦 4.7 横 5.1 器厚 0.9	①普通 ②にぶい黄橙色 ③砂粒	口縁 外反、山形。 外面 半裁竹管文を施す。 内面 撫で。	口縁破片 諸磯b式
3	縄文土器 (破片)	基壇	縦 4.3 横 5.6 器厚 1.0	①普通 ②にぶい黄褐色 ③砂粒	外面 縄文を地文とし横沈線文を施す。 内面 撫で。	体部片
4	縄文土器 (破片)	基壇	縦 4.8 横 5.9 器厚 1.1	①普通 ②にぶい黄褐色 ③砂粒・繊維	外面 羽状縄文を施す。 内面 撫で、荒れている。	体部片
5	石器 打製石斧	1号基壇 覆土	長さ 11.5 幅 4.1 厚み 1.5	④灰色安山岩	短冊形。片面に円礫自然面を残す。刃部に使用痕。	完存 79.5 g

第2節 古代・中世の遺構と遺物

古墳時代の遺構としては、掘立柱建物1、土坑3を確認し調査した。いずれの覆土においても、天仁元(1108)年降下の浅間B軽石(As-B)及び天明3(1783)年降下の浅間A軽石(As-A)が視認されなかったため、中世前期以前と考えられる。いずれからも、伴出遺物はないが、別に土器2点が出土している。以下、位置・規模・形態等について抄述する。なお、計測値はいずれも確認面からのものである。

(1) 1号掘立柱建物

X25577～25584・Y7435674362、に位置。北東－南西方向を長軸とする柱間3間×1間の長方形を呈し、長軸長約4.8m・短軸長約3.2mを測る。少なくとも1度以上の建て替え若しくは補強が行われていたものと考えられる。北東側に、自然の急傾斜が迫っており、建物長軸が延びる可能性はあるまい。

(2) 4号土坑

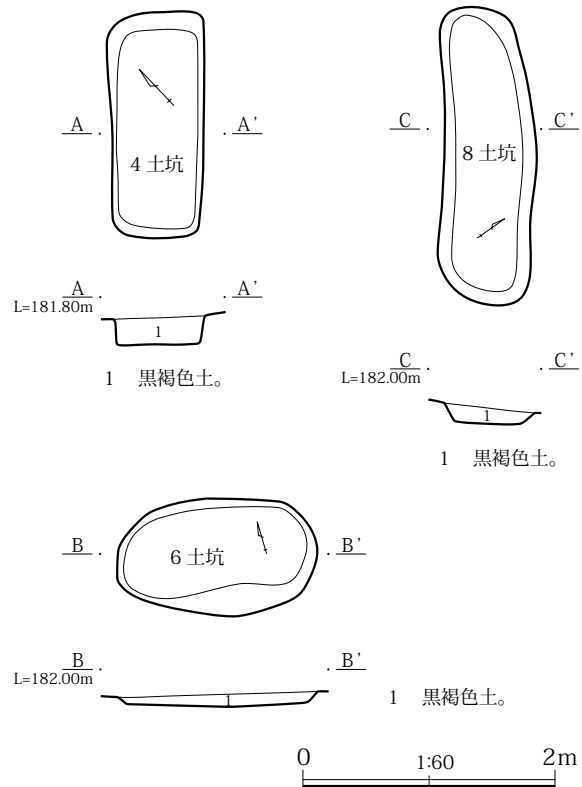
X25576～25578・Y74369～74372に位置。北東－南西方向を長軸とする。長軸長1.8m・短軸長0.75m・深さ0.2mを測り、長方形を呈する。

(3) 6号土坑

X25573・Y74365～74367に位置。東－西方向を長軸とする。長軸長1.6m・短軸長0.6m・深さ0.1mを測り、長円形を呈する。底面及び覆土には炭化物が多くみられたが、焼土はなく、何らかの炭化物混入土の処理坑と考えられる。

(4) 8号土坑

X25568～25569・Y74357～74359に位置。南東－北西方向を長軸とする、長円形の土坑である。

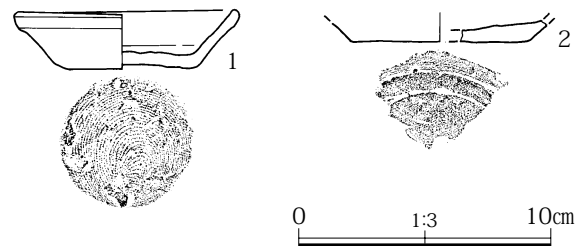


第8図 4号・6号・8号土坑実測図

長軸長2.4m・短軸長0.7m・深さ0.15mを測る。

(5) その他の遺物

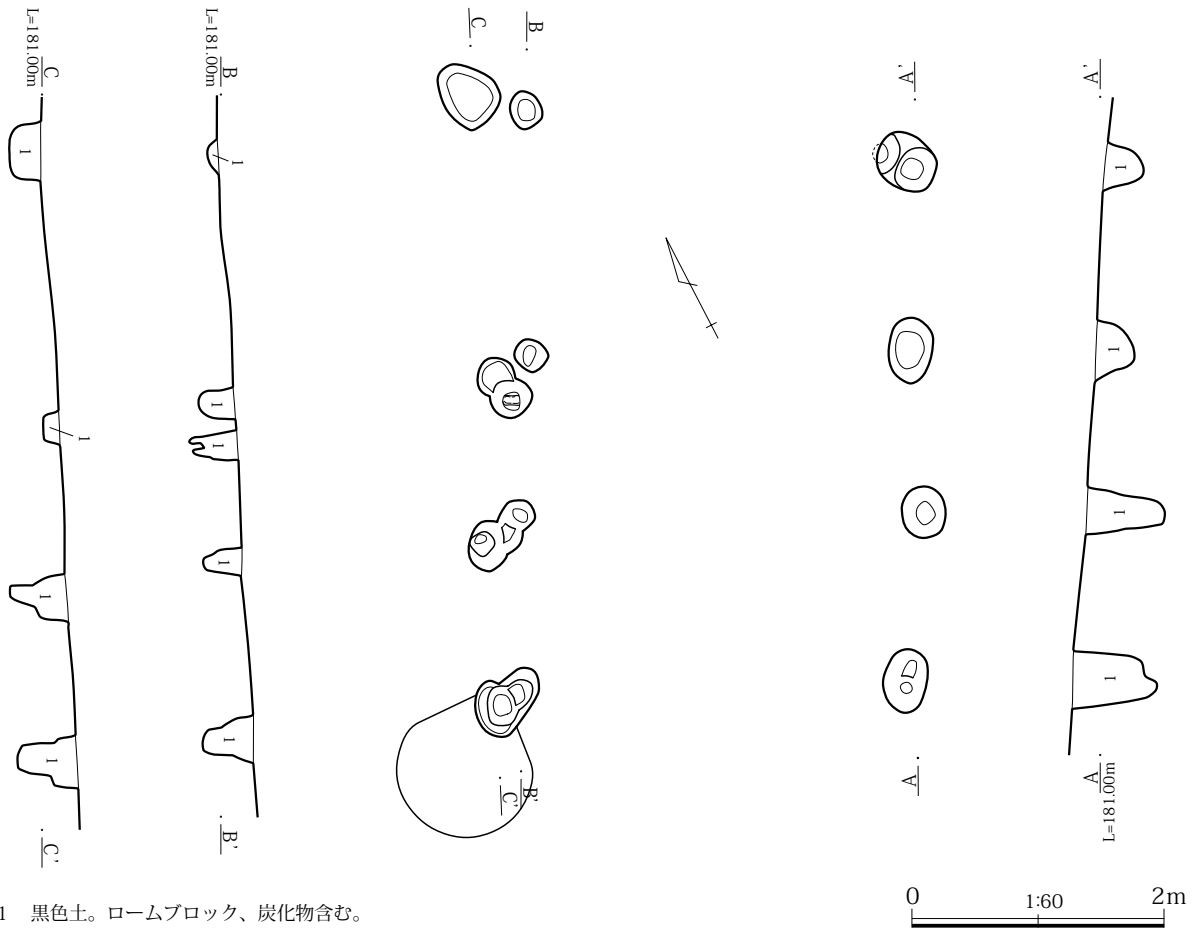
第1面2層中から土器(かわらけ)1点を採集した。口縁の一部が黒変しており、灯明皿として使用された可能性を残す。その他、底部破片1点を得た。何れも中世以降の所産であろう。(第5表)



第9図 古代・中世遺物実測図

第5表 遺構外遺物観察表(古代・中世)(第9図・PL-13)

番号	種類 器種	遺物注記 番号	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④素材	成・整形技法の特徴 (器形・文様の特徴)	残存状態 備考
1	土器(かわらけ) 皿	1面2層	口径 8.6 底径 5.0 器高 2.2	①普通 ②にぶい橙色 ③砂粒	外面 口唇部一部の外端・上端に削り。 内面 横撫で。 底部 回転糸切り痕。	9/10 残存
2	土器(かわらけ) (破片)	5号坑覆土	口径 — 底径 (8.5) 器高 —	①普通 ②にぶい黄橙 ③砂粒	内面 撫で。 底部 匏撫で。	底部 1/4 残存



1 黒色土。ロームブロック、炭化物含む。

第10図 1号掘立柱建物実測図

第3節 近世の遺構と遺物

近世の遺構としては、基壇建物1、区画溝1、土坑7を検出した。基壇建物は基壇盛土に、区画溝・土坑にあっては覆土に、天明3（1783）年降下の浅間A軽石（As-A）の混入が認められたので、いずれも近世末期あるいはそれ以降のものと思われる。以下、位置・規模・形態・遺物等について抄述する。なお、計測値はいずれも確認面からのものである。

(1) 1号基壇建物

X25570～25578・Y74353～74360に位置。確認面に多くの攪乱があり、遺存状態は良好ではなかったが、長さ約1m・幅0.7mの岩の西側に、硬化面が断続的に認められた。硬化範囲は概ね南東―北西方向を長軸として、長軸現長3.5m・短軸現長2.7m・高さ0.2m程度であったが、北側及び南

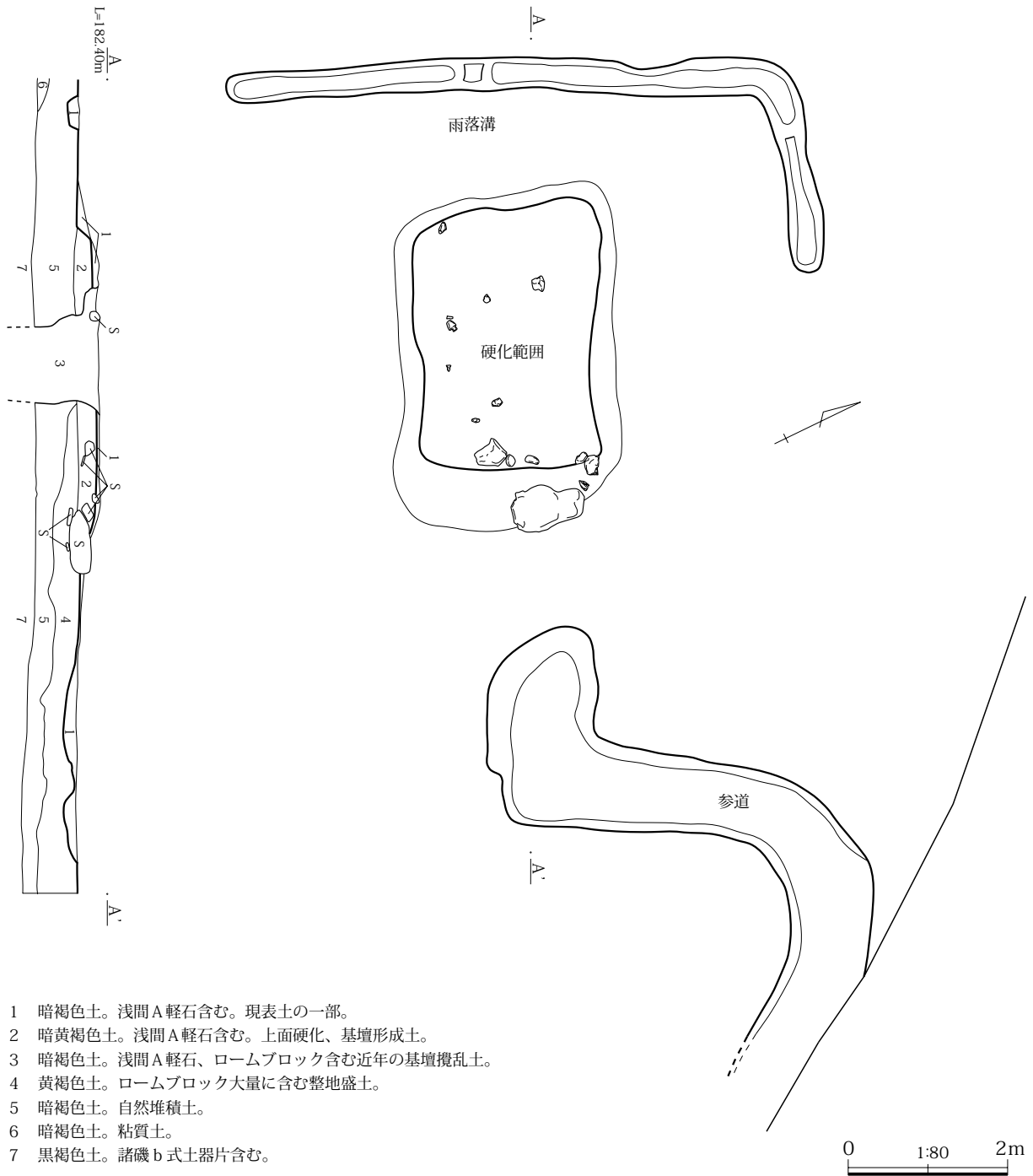
側の削土が著しく、旧態はさらに広範囲であったことが推定できる。硬化面上から礫が数点検出されたが、既に攪乱を受けており、企画性は全く認められなかった。この平滑な硬化面は、建物の基壇と考えられる。

当初検出された岩は、建物正面の出入り口に付随する据石とみられる。

基壇の西及び北側に鍵の手状の細く脆弱な溝が検出された。現長は西が約7m、北は約2.5m、幅は0.4mで、深さは西側中央で0.1m程である。南端と東端は耕地化による削平のため深さを失い、その先を滅失しており、全容は知り得ない。屈曲部が地形上も最も低い。建物に付随する雨落ち溝とみられる。

この他、基壇南東面に検出された据石の中心と同軸線上を起点として、南東へ次いで北東へ屈曲し、

第3章 検出された遺構と遺物



- 1 暗褐色土。浅間A 軽石含む。現表土の一部。
- 2 暗黄褐色土。浅間A 軽石含む。上面硬化、基壇形成土。
- 3 暗褐色土。浅間A 軽石、ロームブロック含む近年の基壇攪乱土。
- 4 黄褐色土。ロームブロック大量に含む整地盛土。
- 5 暗褐色土。自然堆積土。
- 6 暗褐色土。粘質土。
- 7 黒褐色土。諸磯b 式土器片含む。

第11図 1号基壇建物実測図

第6表 1号基壇建物遺物観察表 (第12図・PL-13)

番号	種類 器種	遺物注記 番号	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④素材	成・整形技法の特徴 (器形・文様の特徴)	残存状態 備考
1	五輪塔 空風輪部	1号基壇	長さ 31.8 最大径 14.5	④牛伏砂岩	空風輪部 一石造り。南(修行門)・西(菩提門)・北(涅槃門)各面に、円相に種子を陰刻。東面(発心門)破損。	9/10 残存 6.18kg
2	舟形碑 (身部片)	1号基壇	長さ (27.5) 幅 20.1 厚み 10.6	④牛伏砂岩	正面 縁部に赤塗色が残る。碑面に刻字があったと認められるが中央欠失のため、詳細不明。 背面 舟底形に荒削り整形。	1/2 残存 5.70kg

第3節 近世の遺構と遺物

北東側の斜面に沿って調査区域外へ延びる浅い帯状の窪みを検出した。幅は1m内外、底面が硬くまた小礫が中央に寄るなどの流水による影響を受けた痕跡があった。この帯状の窪みは参道跡と考えられる。

据石の中央と参道との中軸線は、北側雨落ち溝と平行し、西側雨落ち溝と直交する。この中軸線を建物の中軸線として捉えるならば、建立可能な規模を推定することができよう。すなわち四尺五寸庇をもつ十二尺四方の方形建物を想起することができる。

知見を総合すると、この基壇上の建物は、南東方向を正面とした二間四面でおそらくは宝形造りの堂宇であった可能性が高い。瓦片がまったく見あたらず、瓦を伴わない茅葺き等であったのであろう。また、周辺の造成は天明3（1783）年以前と考えられるが、基壇の築造はA軽石降下以降、したがって堂宇の建築はそれ以降とすることができよう。この堂宇については、古記録・伝承にもなく存続期間・廃絶時期はつまびらかでないが、地元の80歳代の古老の記憶にも無く、遺物の検討からも数十年を経て亡失したのではなかろうか。

この遺構に関わる遺物としては、五輪塔空風輪部・舟形碑の断片がある。五輪塔空風輪には、それぞれ円相の中に種子が陰刻されている。舟形碑は縁に赤みが残っており、逆修供養に際して造立されたものと思われる。碑面が荒れ中央部が欠失しているため、刻字等は全くわからない。形態から江戸時代後期・18世紀末ごろの所産であろう。（第6表1～2）

(2) 1号区画溝

X25582～25589・Y74378～74389に位置。傾斜に沿って南東―北西に約5m延び、南西方向へ約1.5m直角に屈曲して調査区域外に至る。南端部は耕作によって損なわれたとみられ、全容は不詳である。土層断面から知りうる旧状の溝幅は約2.5m・深さは0.7mである。屈曲部が最も低位のため、溜水に起因したと思われる窪みがあり、土壌の泥化が認められた。南東端には円礫・角礫がまとまって検出されたが、埋没過程で投棄されたものであろう。

この溝は、1号基壇建物の建てられた造成土上から掘削されたと考えられる。溝内の堆積土の観察から、浅間A軽石（As-A）降下以前に掘削され埋没しながらも小規模の最掘削が行われて維持されていたとみられ、再掘削後の埋没土に浅間A軽石（As-A）の混入が認められる。伴出遺物からも、再掘削は1号基壇建物の設置とほぼ同時期のものとみてよからう。造成地利用にかかわる区画溝と考えられる。

遺物としては、筒形の三足香炉が再掘削後の埋没土中から出土している。口唇部に僅かな釉薬の擦れがあり、別造の蓋があった可能性がある。19世紀後半、瀬戸産のものであろう。他に、平板な陶器の小片が出土している。方形盤もしくは方形鉢であろうか。（第7表1～2）

(3) 1号土坑

X25579～25581・Y74371～74372に位置。北東―南西方向を長軸とする長方形の土坑。長さ1.9m・幅0.95m・深さ0.15mを測る。

(4) 2号土坑

X25579～25581・Y74369～74371に位置。南東―北西方向を長軸とする長円形の土坑で、長さ2m・幅0.7m・深さ0.15mを測る。3号土坑より後出。

(5) 3号土坑

X25578～25579・Y74368～74369に位置。南東―北西方向を長軸とする長円形の土坑。長さ1.6m・幅0.7m・深さ0.1mを測る。2号土坑に先行する。

(6) 5号土坑

X25574～25576・Y74537～74370に位置。南東―北西方向を長軸とする幅のある長方形の土坑。長さ2.2m・幅1.5m・深さ0.15mを測る。

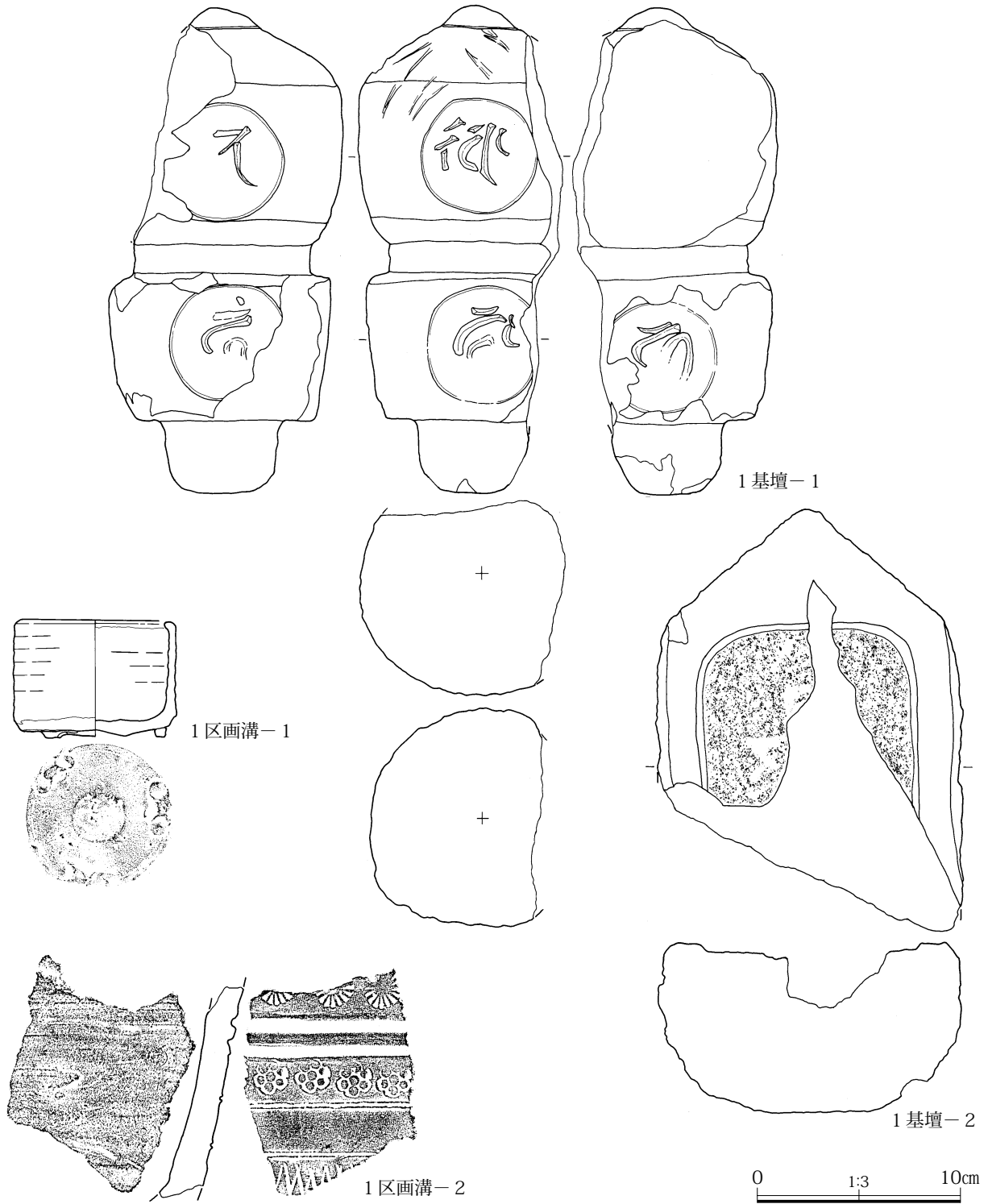
(7) 7号土坑

X25575～25577・Y74364～74365に位置。ほぼ南―北方向を長軸とする長円形である。長さ1.8m・幅1m・深さ0.15mを測る。

(8) 9号土坑

X25575～25577・Y74349～74351に位置。

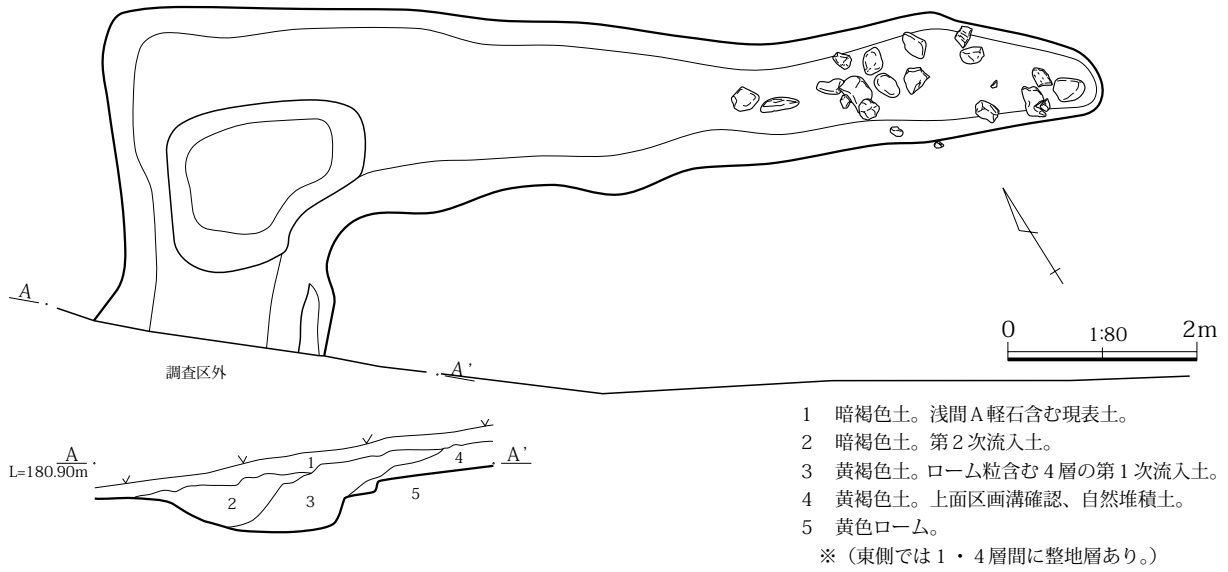
第3章 検出された遺構と遺物



第12図 近世遺物実測図

第7表 1号区画溝遺物観察表 (第12図・PL-13)

番号	種類 器種	遺物注記 番号	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④素材	成・整形技法の特徴 (器形・文様の特徴)	残存状態 備考
1	磁器 香炉	2層上面	口径 7.8 底径 7.6 器高 7.6	①普通 ②オリーブ黄色 ③白色粘土・長石粒	外面 轆轤成形痕、淡緑釉口縁及び体部施釉。 内面 轆轤成形痕。 底部 窺切り後、小型三足貼付。	9/10 残存
2	陶器 (破片)	2層上面	縦 12.0 横 9.0 器厚 1.3	①普通 ②灰黄褐色 ③砂粒	外面 沈線による横帯区画に鋸歯文・菊花様及び梅花様 の陰花文。 内面 横撫で。	体部片

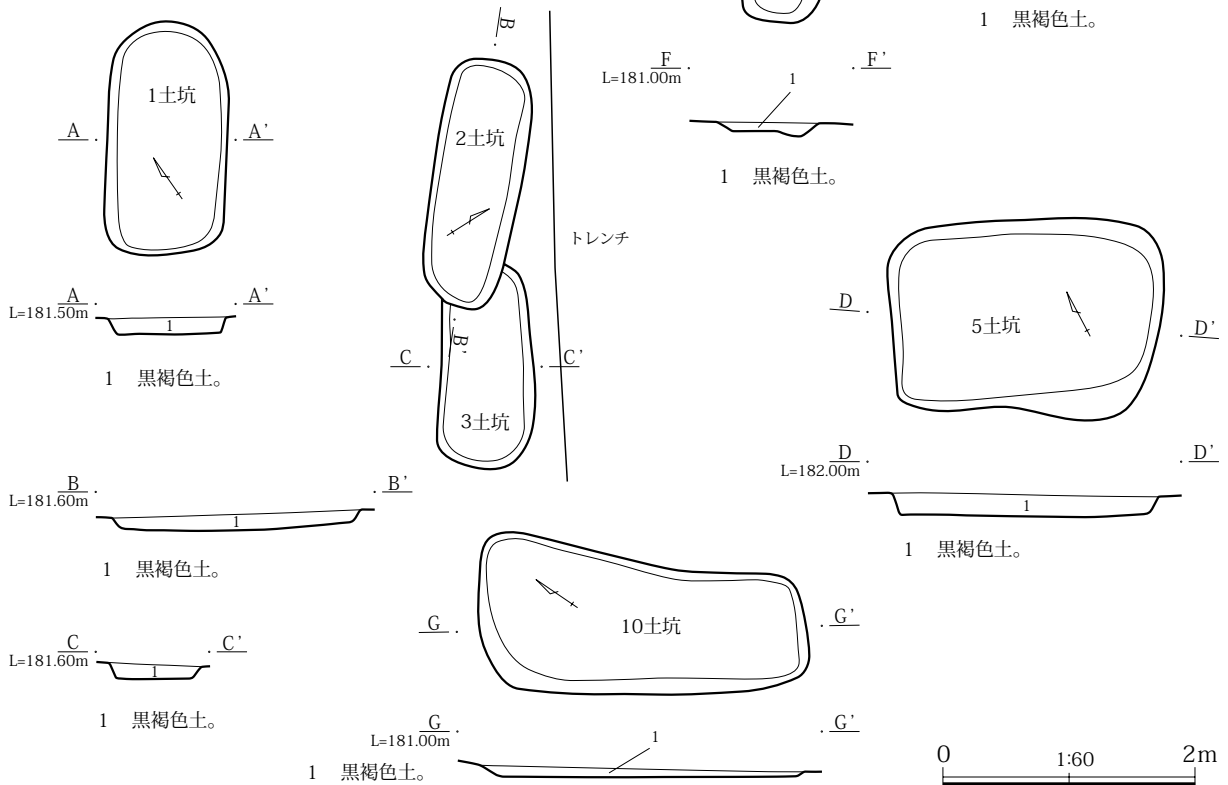


第13図 1号区画溝実測図

南西—北東方向を長軸とする、長方形土坑。北東端が、調査区域外に延びる。長さ2.3m・幅0.8m・深さ0.05m（表土下土層断面図0.4m）を測る。

(9) 10号土坑

X25569～25572・Y74348～74349に位置。南東—北西方向を長軸とする不定長方形を呈する。長さ2.6m・幅1.1m・深さ0.05mを測る。



第14図 1号～3号・5号・7号・9号・10号土坑実測図

第4章 まとめ ー検出遺構からみた多比良天神原遺跡Ⅱー

縄文時代の多比良天神原遺跡

今回の調査に先行し、平成8年11月から翌9年9月までの間、吉井町教育委員会が主体者となって、本遺跡東側区域（Ⅰ）の発掘調査が実施されている。報告書に拠れば、縄文時代前期の住居跡6軒・配石遺構3基が検出され、前期前半に属する有尾・関山・黒浜式土器などが出土している。

今回の調査範囲（Ⅱ）では、前期後半の諸磯b式土器の細片が僅かに採集されたのみで、遺構の検出には至らなかった。

I・Ⅱを通じ、中期の遺構・遺物は発見されていない。近接地では、北に接する普賢寺周辺が中期の遺跡として登録されている（吉井町0180遺跡）。先行報告では、本遺跡とこれらは同一台地上であるとの見解もあるが、本遺跡は上位段丘基部、0180遺跡は上位段丘端部にあたり、第2章第2節で既述したように、これを別の段丘とする見解も示されるほど異なる地勢を示す。

後期の遺構としては、今回、称名寺Ⅱ式土器を出土した柄鏡形住居が1軒のみ確認されている。調査区域が限定的であり削平も顕著であったため確証はないが、遺物の散布も全く認められず、そう多くの住居があったことは推定し難い。

以上を総合するならば、本遺跡の縄文時代は、Ⅰにおける前期前半期の集落遺跡が主体であり、その後は後期の一時期にわずかに居住が認められる状況であったのであろう。

近世墓地と小規模仏堂

不完全ながら仏堂に関する悉皆調査を行ったところ、多比良地区における現存寺院は普賢寺一カ寺のみであるが、他に摩崖仏（谷の不動尊）、小規模な仏堂が三箇所確認できた。しかし、廃寺・合併記録、字名、墓地における無縫塔などから、かつて寺院・仏堂が少なくとも23カ所あったことが考えられるに至った。（第8表・第15図）宗派は、早く廃寺

となった光明寺が真言宗から天台宗に変更になったほかは、本末関係から多くが天台宗に属していたことが推定できた。仏堂では、普賢寺に合併された大日堂の本尊が、真言宗の中心仏である大日如来ではなかったかと推定される以外、天台宗主尊の薬師如来と、阿弥陀如来・観音菩薩など浄土教系の仏を本尊とする傾向が認められる。浄土宗は天台宗から立宗され、天台浄土教学も盛んであったので、これらの仏堂が天台宗に属することについての矛盾点は認められない。

浄土信仰は、平安時代後期・12世紀から盛んになり、現代に至る間、民衆の来世観を主導してきた。その教理は、死後、阿弥陀如来が住む西方極楽浄土への往生を希求するものであり、関東のみならず、阿弥陀如来・観音菩薩・地藏菩薩への帰依が全国的な普及をみせている。また、天台宗の関東農村部への広がりには、江戸幕府と天台宗との政教共同行動との関連から近世に拡充する。また主尊薬師如来は疾病救済という現実生活における祈りの対象となっており、今般の悉皆調査でも「目の神」＝「薬師如来」の構図が認められた。これらはまた寺院内における安置にとどまらず、墓地に隣接して設けられた小規模仏堂の主尊や墓道の石仏という姿もなしたのである。さらに注意すべきは、集落や有力一族の墓地に僧侶の墓碑である無縫塔が遺存していることである。これは自邸接待のほか、まさにその地に僧侶の寄留・活動拠点となった仏堂が営まれていたことを暗示するものであり、同時に旅僧を支援する村落構造が存在したことを物語るものであろう。

今回の発掘により、当該地において大規模な造成工事が行われていたことを知り得た。この造成が字名に残る「積善寺」に関わるものである可能性が残る。ただ、検出された1号基壇建物が積善寺の後裔になる堂宇であったか否かは詳らかではなく、むしろ、悉皆調査で推定できた集落の墓地に付随する仏

堂の一つであったのではなからうか。遺構の計測値から復原しうる堂宇の規模は、先に示したように二間四面の方形であるが、この規模は甘楽町金井の姥子堂など現存例も多く、当時の普遍性を示すものであろう。1号基壇建物に該当する記録は現段階では見あたらず、このことから字柳谷の阿弥陀堂などが普賢寺に合併される以前に廃絶したものと考えられ、発掘からの知見と併せ、長くとも江戸時代末期から明治時代中頃までを存続期間とするものであったと考えられる。

寺院施設の廃絶の背景は幾つか考えられる。まず、①明治元（1868）年に起こった「廃仏毀釈」により、寺院・堂宇・仏像等が破却・損壊を受け、継承者が半減した。併せて、②寺院の経済的基盤であった幕府朱印地が、明治4（1871）年の「寺領上知令」により失われた。その後、③昭和22（1947）年、連合国軍総司令部（GHQ）による「農地解放指令」によって、寺院に付随していた農地が強制譲渡された。また、小規模仏堂の維持に関連して、④治安確保や戸籍法の厳格化により旅僧の寄留・支援構造が村落自体から失われたことも大きな背景になったものと推測する。

今回検出された遺構について、その廃絶の背景を論断することは困難であるが、存続時期からは「廃

仏毀釈」の影響が先ず考えられよう。この文化的変行に対し、他地域では反対運動もあったとも聞く中で、当地においてどのような状況であったのかは詳らかでなく、悉皆調査を通じて知り得た当地の近世から近代に至る穏やかな集落景観を想起しつつ引き続きさらに検討を深めるべき課題とするに留めたい。



【参考】金井姥子堂（江戸後期・甘楽町）
時期・構造から1号基壇建物に近似する遺例と考えられる。（屋根は葺き替えられている。）

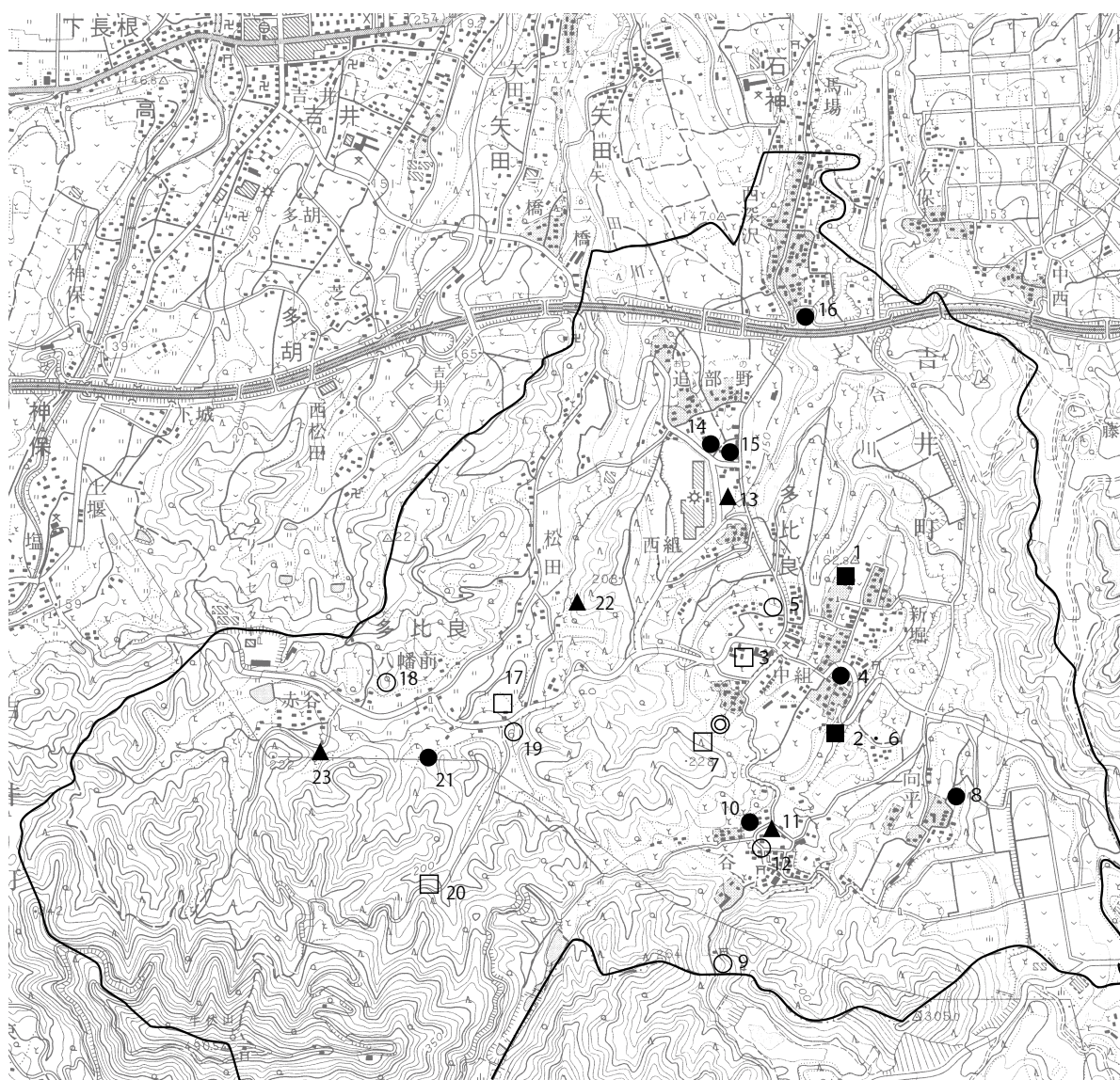
【参考文献】吉井町教育委員会 1991『吉井町の中世城館跡』・同 2000『多比良天神原遺跡発掘調査報告書』、吉井町 1974『吉井町誌』、竹内理三 1988『角川日本地名大辞典 10』角川書店、萩原進 1981『上野国群村誌 7』、山崎一 1979『群馬県古城址の研究・補遺篇上巻』、群馬県 1938『上毛古墳綜覧（群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第5輯）』

第8表 多比良地区寺院一覧表 ※今回の遺構○を除く。全踏査済。「字観音山」があるが、矢田天久沢観音堂に関連するため除外。

番号	名称	所在	開創	記事	現状	文献等
1	普賢寺	中城	伝、平安・延喜年間(901～923)	天台宗・本尊阿弥陀如来。永禄6(1563)年または天正18(1590)年、焼亡・再建するという。合併寺院本尊等安置。	現存	『吉井町誌』『角川日本地名大辞典』
2	清瀧寺	滝の前・諏訪前	不詳	天台宗・本尊阿弥陀如来。「吉井宿組合村々書上帳(文政年間)」に記載。昭和30(1955)年、普賢寺に合併。無縫塔等遺存。	廃寺	『吉井町誌』『角川日本地名大辞典』
3	光明寺	光明寺	不詳	真言宗→天台宗。「真言宗臨終用心(長享2年)」奥書に見える。「延養寺文書(天正4年)」に普賢寺と併記、共に延養寺末とある。明治8(1875)年段階ではすでに消滅。字名に残る。推定地有り。	廃寺	『群馬県古城址の研究補遺篇上』『角川日本地名大辞典』
4	観音堂	諏訪前	不詳	明治43(1910)年、普賢寺に合併。本尊観音菩薩。道路拡幅により廃堂。無縫塔等遺存。	廃堂	『吉井町誌』竹原観秀氏教示
5	大日堂	西浦	不詳	大正年間、普賢寺に合併。本尊大日如来。文化年間石塔類遺存。	廃堂	『吉井町誌』竹原観秀氏教示
6	観音堂	滝の前	不詳	昭和30(1955)年、清瀧寺と共に普賢寺に合併。本尊十一面観音菩薩。	廃堂	『吉井町誌』
7	積善寺	積善寺	不明	字名にのみ見え、積善山と通称。今回の調査地に南接。	—	『角川日本地名大辞典』
8	薬師堂	向平	不詳	岡部家墓地内。無縫塔遺存。	現存	小根澤雪絵氏教示
9	摩崖仏(不動尊)	谷	伝、平安時代前期	堂宇無し、摩崖仏。不動明王・十三仏。江戸時代末まで普賢寺に属す。現地確認済み。	現存	『吉井町誌』
10	観音堂	谷	不詳	本尊千住観音、清瀧寺を経て普賢寺伝存。小柏家墓地隣接。安永年間無縫塔遺存。	廃堂	塩澤信満氏教示

第4章 まとめ

11	(不詳)	谷	不詳	塩澤家墓地。無縫塔遺存。	—	塩澤信満氏教示
12	(薬師仏)	谷	不詳	路傍。本尊、目神と称す板碑片。正徳三年供養塔あり。	石堂	塩澤信満氏教示
13	(不詳)	吹返木	不詳	個人墓地。無縫塔遺存。	—	
14	薬師堂	間ノ田	不詳	天田家墓地内。安永年間無縫塔遺存。	現存	
15	観音堂	常木	不詳	地区墓地内。無縫塔遺存。	廃堂	
16	薬師堂	滝ノ宮	不詳	高橋家墓地内。薬師如来石仏は町指定。無縫塔遺存。	新造	
17	松田寺	一丁田か	不詳	天台宗。「吉井宿組合村々書上帳(文政)年間」に記載。現地踏査するも不詳。推定地あり。	廃寺	長谷川寛見氏教示 『角川日本地名大辞典』
18	阿弥陀堂	堂城	不詳	現地踏査済み。或いは松田寺等中世寺院の一部か。	廃堂	『中世吉井の城館跡』
19	薬師堂	湯端	不詳	推定地あり。鉱泉施設あり。	廃堂	長谷川寛見氏教示
20	見明寺	見明寺	不明	字名・林道名に残る。推定地有り。	廃寺	『角川日本地名大辞典』 小林次郎氏教示
21	阿弥陀堂	柳谷	不詳	明治42(1909)年、普賢寺に合併。本尊阿弥陀如来。影の墓地内。無縫塔等遺存。	廃堂	『吉井町誌』 小林次郎氏教示
22	(不詳)	北谷戸	不詳	武藤家墓地。無縫塔遺存。	—	
23	(不詳)	赤谷	不詳	入山下の小林家墓地。無縫塔遺存。	—	



凡例 □ 寺院(廃寺を含む) ○ 仏堂(廃堂を含む) ◎ 今回調査遺構
 ■ 寺院(廃寺を含む) + 無縫塔 ● 仏堂(廃堂を含む) + 無縫塔 ▲ 無縫塔のみ(仏堂不詳を含む)

第15図 多比良地区寺院等位置図 (S=1:25,000)

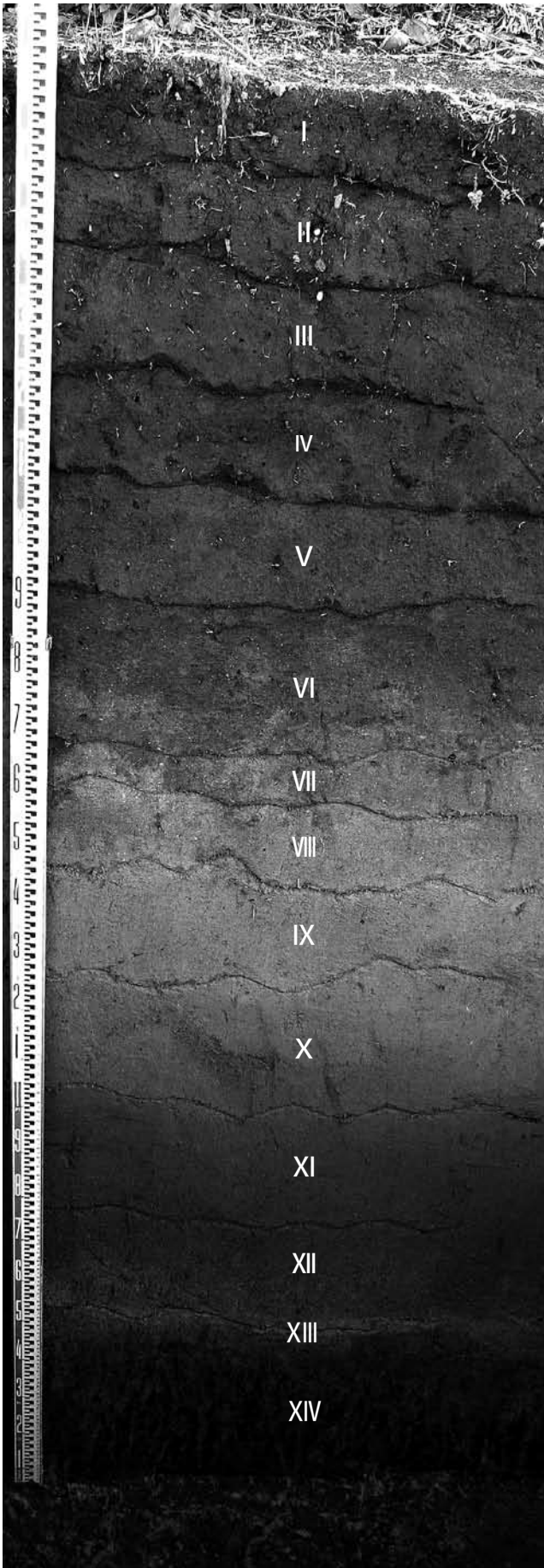
写真図版



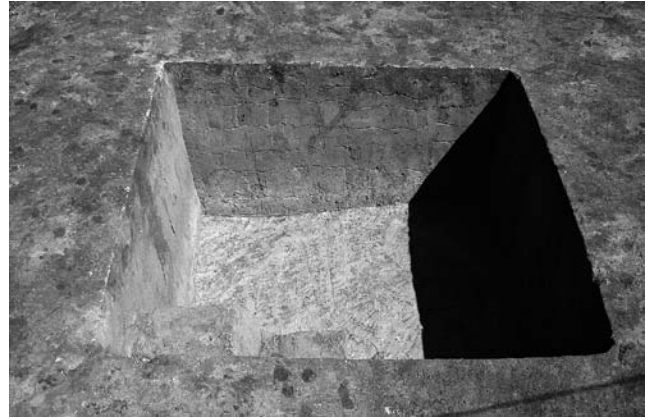
多比良天神原遺跡全景Ⅱ（北東方向から遺跡と牛伏山をのぞむ）

PL-2

基本土層・旧石器試掘



基本土層（南壁中央。北から）



トレンチ1（南から）



トレンチ2（南から）



トレンチ3（西から）



トレンチ5（南から）



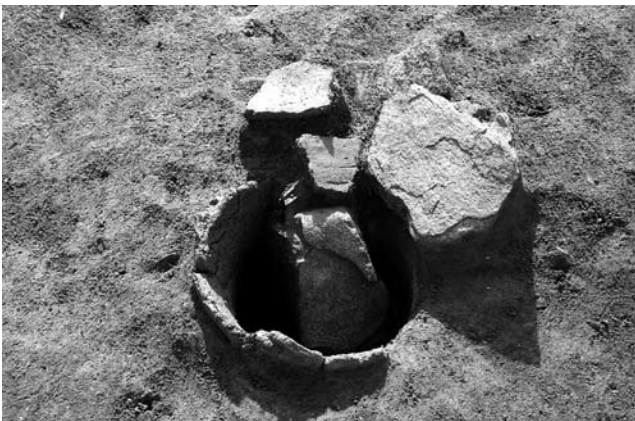
全景（南西から）



柄状突出部検出状態（敷石上に土器を検出。南西から）



柄状突出部完掘状態（埋甕炉を検出。南から）



埋甕炉検出状態（南東から）



埋甕炉断ち割り状態（南東から）



壁溝全景（南から）



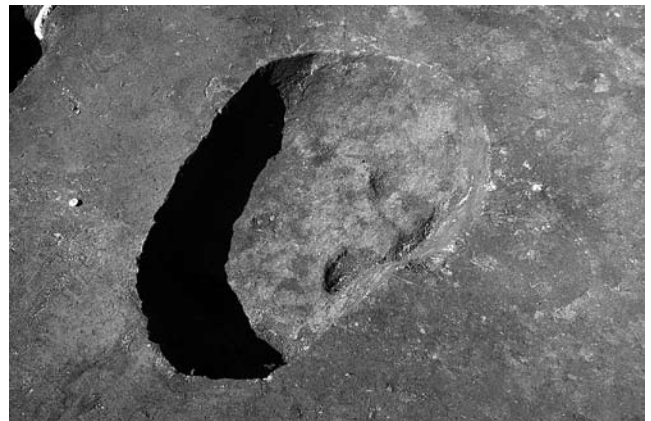
壁溝の結晶片岩検出状態（東から）



石囲炉検出状態（南から）



埋覆炉完掘状態（南東から）



石囲炉完掘状態（南東から）



全景（南西から）



柱穴①土層（南東から）



柱穴②土層（南東から）



柱穴③土層（南東から）



柱穴④土層（南東から）



全景（南東から）



据石検出状態（南東から）



据石撤去状態（南東から）



遺物検出状態（五輪塔空風輪部。南東から）



雨落溝土層（南西から）



全景（南西から）



土層（南東から）



道路遺構全景（南西から）



遺跡東半部造成盛土土層（北東から）



全景（東から）



全景（北西から）



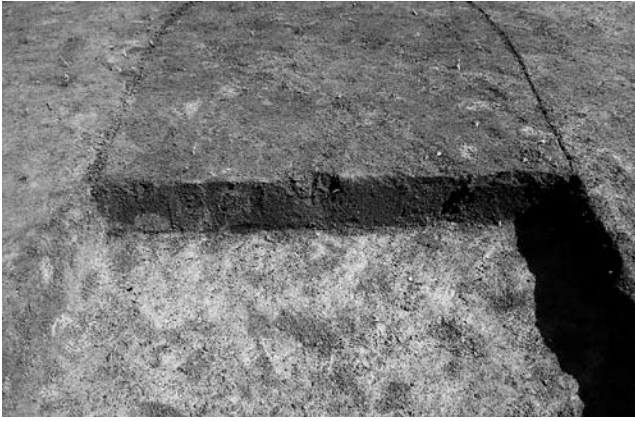
土層（北東から）



全景（北東から）

土坑①

PL-9



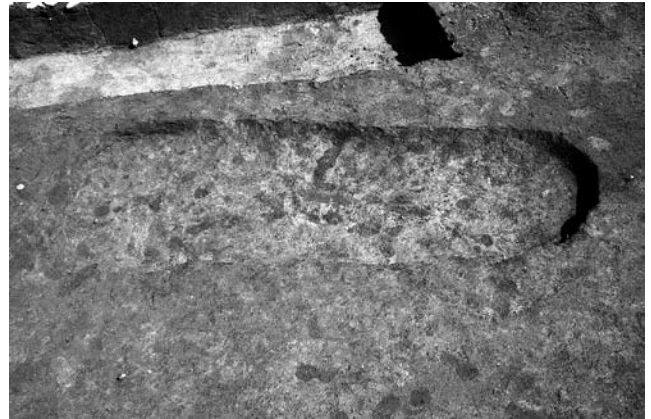
1号土坑土層 (南西から)



1号土坑全景 (南西から)



2号土坑土層 (南西から)



2号土坑全景 (南西から)



3号土坑土層 (南東から)



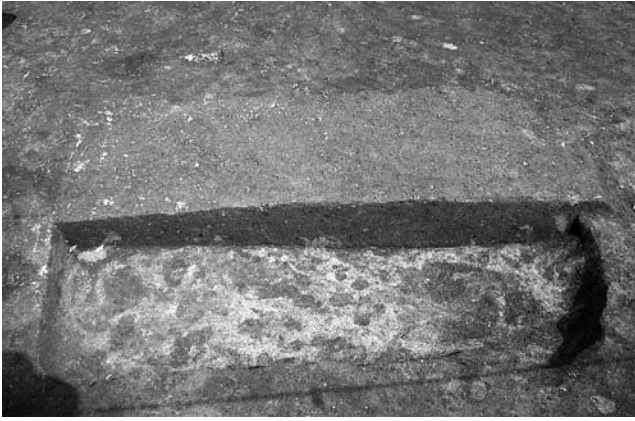
3号土坑全景 (南東から)



4号土坑土層 (南西から)



4号土坑全景 (南東から)



5号土坑土層 (南西から)



5号土坑全景 (南西から)



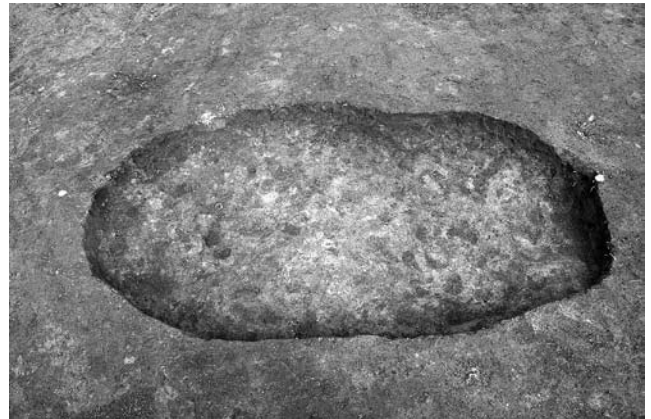
6号土坑土層 (南西から)



6号土坑全景 (南西から)



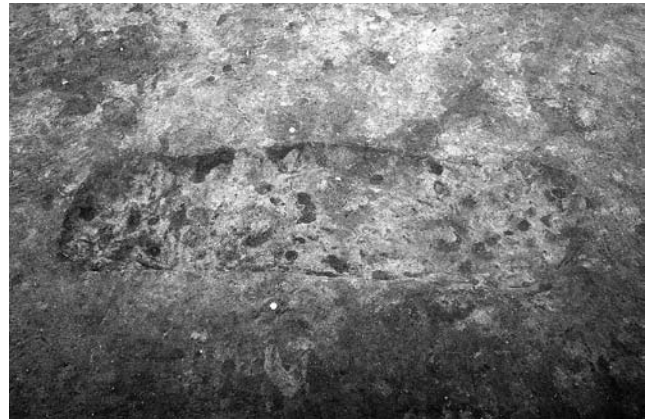
7号土坑土層 (西から)



7号土坑全景 (西から)



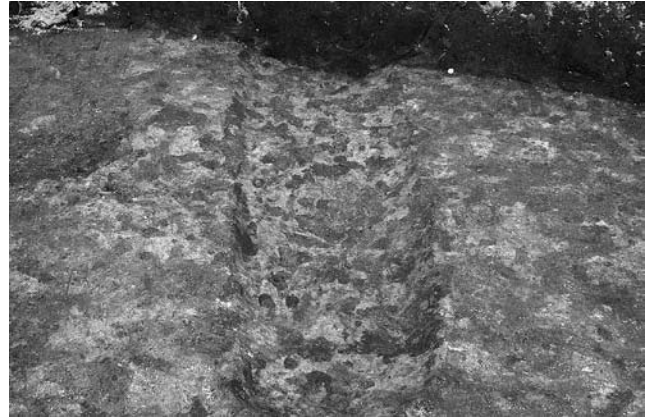
8号土坑土層 (南東から)



8号土坑全景 (南西から)



9号土坑土層 (南西から)



9号土坑全景 (南西から)



10号土坑土層 (南西から)



10号土坑全景 (南西から)



11号土坑土層 (南西から)



11号土坑全景 (南西から)



12号土坑土層 (南東から)



12号土坑全景 (東から)



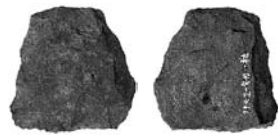
1住-1



1住-2



1住-3



1住-10



1住-4



1住-6



1住-7



1住-5



1住-8



1住-9



1土-1



遺外-1



遺外-2



遺外-3



遺外-4



遺外-5



古代・中世-1



古代・中世-2



1基壇-1



1基壇-2



1区画溝-1



1区画溝-2

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	たいらてんじんばらいせきに
書 名	多比良天神原遺跡Ⅱ
副 題	地方特定道路整備事業（主要地方道神田吉井停車場線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	450
編著者名	唐澤至朗
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20081215
作成法人 ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北橘町下箱田 784 番地 2
遺跡名ふりがな	たいらてんじんばらいせき
遺 跡 名	多比良天神原遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたのぐんよしいまちたいら
遺跡所在地	群馬県多野郡吉井町多比良
市町村コード	103632
遺跡番号	202
北緯（日本測地系）	36-13-37
東経（日本測地系）	139-00-24
北緯（世界測地系）	36-13-48.3423
東経（世界測地系）	139-00-12.5484
調査期間	20070901 - 20070930
調査面積	600
調査原因	道路
種 別	包蔵地・集落・寺院跡
主な時代	縄文後期・中世・近世
遺跡概要	縄文後期住居跡 1 ・中世掘立柱建物 1 ・近世堂宇 1、その他土坑など。
特記事項	寺院形成に先立つ土地造成を確認。
要 約	縄文時代前期諸磯 b 式土器片少量採集。後期称名寺Ⅱ式土器を伴う住居 1 基・埋甕炉、中世掘立柱建物 1 基、近世末期の小規模仏堂跡と推定される基壇建物及び、それをさかのぼる土地造成を確認した。

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査事業団調査報告書第 450 集

多比良天神原遺跡Ⅱ

地方特定道路整備事業(主要地方道神田吉井停車場線)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 20 年 12 月 15 日 印刷

平成 20 年 12 月 15 日 発行

編集／発行 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒 377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田 784-2

電話 0279-522511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org>

印刷／川島美術印刷株式会社